葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ⑥

明治大学博物館　外山　徹

談林の再興

仁王像の胎内から発見された銘札には延宝五年（1677）十一月晦日の火災による薬師堂の焼失が記されていた。仁王像の再興は貞享元年（1684）。

寛延三年（一七五〇）の高尾山縁起には、二人の将軍の諡名が記されている。江戸前期の山史において特筆すべき事柄と認識されていたが故なのだろうが、すなわち、前回述べた三代将軍家光による寺領朱印状の発給につづいては、五代綱吉の時の談林の再興である。

談林の再興

寛延縁起に曰く、

憲廟の時。刹主秀永東都に入り。祠部の吏に請ひて曰く。

「憲廟」とは常憲院、すなわち将軍綱吉のこと。江戸に行き「祠部」とは神祇官の唐名なので、徳川幕府に該当する役所としては寺社奉行所ということになる。「吏」とは役人のこと。そこに要請して申し上げたことには、

昔は我山、朝命を承くること厚し。衆僧を集め。経論を講習す。是を檀林となす。

「朝命」は朝廷の命令とそのまま取っておくが、それにより僧侶を集め経典を論じ談林（僧侶の教育機関のこと）となっていた。

越すに以って厳険に在り。薪水に労す。四方の僧徒至らず。法壇、久しく廃す。

参集するには険しい山にあり、薪や水にも苦労するため、周辺の僧侶が集まらなくなり、久しく廃れてしまった。

命を賜ひ旧に復し得るを伏して願う。秀永力を法談に竭し。以て衆僧の率とならん。祠部聞くを以て。教へて曰く。可なりと。実に元禄十五年也。

命により元の通りに復活させたい、山主秀永が法談に尽くし後進の僧侶を育成したいと願ったところ、元禄一五年（一七〇二）にそれを許されたとしている。

この願い出は実際に文書（控え）が残っている。寛文（一六六一～七三）までは談林となっていたが、延宝（一六七三～八一）の火災によってそれが中断してしまったと書かれている。薬王院が地方の教学拠点であったことは、一〇世堯秀が醍醐寺から経典と法器を携えて下向したことからも推定されるが、その後、所々に乱立気味の談林設立には制限がなされるようになっていた。

この談林再興を願い出た先について、縁起は「祠部之吏」としているが、薬王院文書に残る文面は、新義真言宗の僧録（一派の人事などを統括する役職）を務めた護持院隆光を宛所としている。隆光は智積院・長谷寺の両能化に諮問、賛同を得て決済しているが、縁起にわざわざ「憲廟の時」と記しているのは、隆光が綱吉の帰依を受け近侍する存在であったことを意識したのかもしれない。

談林での修学は将来住職に就くために不可欠であり、中本寺として配下寺院の人事を司る立場としても再興は悲願であっただろう。また、談林で

あることが寺院としての格式を示すものと認識されていたとの指摘もあり、その意味では七五石の寺領認可と合わせて、この二つの事象は薬王院の寺格確立の大きな契機として認識されたのだろう。

五代藩主吉宗

元禄一一年（一六九八）、二代和歌山藩主徳川光貞が隠居、長子綱教が後を継いだ。しかし、宝永二年（一七〇五）五月、数え四一歳の若さで死去してしまう。綱教に嗣子はなく次弟も夭逝していたため、次の弟頼職が養子となって四代藩主を継ぐべく急遽和歌山に赴くが、体調を崩して同年九月に急死。八月には光貞も世を去っており、この年は紀州家にとってまさに厄年であった。

そこで藩の前途を託されたのは、末子故に部屋住を覚悟していたはずの四男頼方であった。将軍の片諱をもらい吉宗と改め、数え二二歳で五五万五千石の大藩を背負うことになった。吉宗は貞享元年（一六八四）一〇月二一日和歌山に出生。元禄一〇年、将軍綱吉に拝謁し越前国（福井県）葛野藩三万石に封ぜられるが、それは形式的なもので領地へは赴かず和歌山と江戸の間を往き来する身であったものが、立場は急変、兄二人と父を一時に失って厳しい状況に置かれたわけである。

吉宗に課された最大の課題は財政再建であった。それは、父光貞から兄綱教に引き継がれ、未だ成し得ていない難題であった。まずは緊縮財政の徹底である。吉宗一流の倹約政策で自ら綿服を着用するなど率先垂範に努めた。そして、何より財政基盤の強化で、父の施策を引き継ぎ灌漑設備の整備や新田開発を推進した。その中で注目されるのは井沢弥惣兵衛をはじめとする大胆な人材登用である。井沢は農民の出であったが、吉宗に見出だされて後には幕臣となり、彼の紀州流と呼ばれた治水技術の普及は我が国治水史の転換点となった。

吉宗は伊藤仁斎や木下順庵といった当世一流の学者の門弟を招いて学問所を設立し、武芸の修練を奨励するなど、その施策はまさに質実剛健と言うにふさわしいものであった。当初急場をしのぐため藩士に課した差上金も四年後には返却し、幕府からの拝借金も完済、藩主就任から一〇年余りの内に財政は好転し、藩の御金蔵にも十分な備蓄が出来た頃、またしても思いがけない人生の転機を迎えることになる。

吉宗八代将軍へ

正徳六年（一七一六）四月、少年将軍家継は重い病の床にあった。御三家当主が集められ、吉宗は前の将軍家宣の正室天英院から家継の後見を申し付けられた。意味することは明白である。実は家宣在世中、既に子息の夭逝が相次ぎ、家継にもしものことがあった場合、御三家筆頭である尾州家吉通が後継と目されていた。しかし、吉通は家継よりも先に死没、子の五郎太も夭逝したため弟の継友が後継となっていたが、他の二家の当主に比して若年であった。

吉宗は固辞したが、家宣の側用人だった間部詮房や水戸家当主綱條の説得によってそれを受け入れたと言われる。吉宗の決心を待ったかのごとく翌日家継はこの世を去った。本来、家格の上では尾州家が筆頭ながら、血統として家康に最も近かったからとも言われるが、天英院が吉宗を見込んだ理由は、やはり藩政における改革の実績であり、将軍にふさわしい人材と親しい者たちが認めたということだろう。その後、藩政における事績は享保の改革で幕政に実践されることになる。

後の記録に拠ることにはなるが、高尾山一四世秀永は同年五月二一日、増上寺において家継死去にともなう納経御礼に参列している。そして、七月三日、江戸城本丸帝鑑之間において吉宗の将軍就任にともなう代替御礼に登城、翌々年の七月二日に寺領の朱印状の更新を受けている。そして、その記録の後に続く記載には「同年四月十六日放生会御奉納」とある。これは「御奉納」とあるからには、吉宗の意向によるものという意味に取れるが、この放生会奉納とは一体いかなる事なのだろうか？

《参考文献》中島由美「高尾山薬王院の檀林再興と報恩講について」（村上直編『近世高尾山史の研究』雄山閣出版、一九九八）、小山譽城『徳川将軍家と紀伊徳川家』（清文堂、二〇〇一）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。